

児童の持つ動物の種類の違いによる死生観の実態と発達差

松本 勝信

MATSUMOTO Katsunobu

大阪教育大学

【キーワード】 死生観, 生命観, 生命概念, 死概念

1. 研究の背景と目的

理科の目標の一つに、生命を尊重する態度を育てることが指摘される。生命を軽んじる凶悪事件の低年齢化において、心の教育として道徳教育が強調されるが、生命そのものを教材として扱う理科も重要な責務を持つものである。

生命について考える時、生命誕生から成長変化のみを扱うのではなく、「死」を取り上げることにより、科学的な生命観をより深めることができる考える。また、それは生命を尊重する心を育てる上で必要不可欠といえよう。しかし、わが国の理科の現行の学習指導要領においては、生物の死を扱うのは、4年生の「夏生1年生の植物と落葉樹を対比することで植物の個体の死について触れる」という記述が内容の取扱いの項にあるのみである。このような状況において、児童の持つ死についての認識や死生観の実態を明らかにし、そこから生命観育成のカリキュラムや授業を提案したい。

このとき、先行研究として、例えば日本理科教育学会の研究紀要の最近20年間をみると、小学校A区分と中学校第二分野などの自然認識に関する論文は28編みられた。しかし、そのいずれもが生命誕生からの成長変化や生命維持活動に関するものであり、動植物の死に対する自然認識に関するものは皆無であった。日本科学教育学会の研究紀要においても同様であった。

松本・山崎¹⁾は、「生物が生き返ることができるか」という調査を1, 2, 4, 6年生対象に行い、低・中・高学年とも、「生き返る」と考える児童が約3割いることを指摘した。また、松本・松岡²⁾は、同様に「動物は生き返ることができるか」という調査を1年生から6年生まで全学年対象に行い、「生き返らない」と考える児童が1・2年生で7割強であったのが、学年が上がるにつれて減少し、6年生では約4割の児童のみが生き返らないとしていた。「生き返る」と考える児童は1・2年生の1割前後か

ら、学年が上がるにつれて増加し、6年生では約3割へと増加していた。

本発表では、これらの先行研究を背景にして、動物の種類の違いによる死生観の違いの有無やその実態と発達差を明らかにする。

2. 研究方法

(1) 調査内容として選んだ動物は、児童の身近な生き物として、直接的あるいは間接的に体験していると思われるものから、人、イヌ、カラス、ヘビ、メダカ、蚊、チョウ、ダンゴムシの8種類を用いた。

(2) 質問紙法を用い、上記各動物ごとに次に要約するような問いかけで回答を求め、3年生以上には選択理由を自由記述で求めた。

『人(自分)はいつか死んでしまいます。死んでしまった人(自分)についての説明で、あなたの考えに近いものをいくつかでもいいので、番号に○をつけてください。』

- ①死ぬ前の「人(自分)」に生きかえる
- ②別の「人間」になって生まれかわる
- ③他の動物になって生まれかわる。
- ④草や木などの植物になって生まれかわる
- ⑤絶対に生まれかわったり生きかえらない
- ⑥ どうなるかわからない』

(3) 調査対象は大阪府下の公立小学校児童1年生から6年生まで687人であった。

これらの調査結果について、本発表当日、詳しく報告する。

引用・参考文献

- 1) 松本勝信・山崎亜紀穂(2003)「動物の死に対する児童の概念—低・中・高学年の発達差と理科のカリキュラム—」大阪教育大学理科教育研究年報, No. 27, pp37-48.
- 2) 松本勝信・松岡美鈴(2004)「児童の持つ動物の死に対する概念の実態と発達差」2004年度日本理科教育学会近畿支部大会口頭発表